

# 尾張七宝焼の伝統と展望

窪田由奈（愛知東邦大学）

Keyword：七宝焼、伝統、尾張七宝焼

## I. 背景・目的

「七宝焼」は、日本の伝統工芸品の一つである。愛知県あま市七宝町で生産されるのが「尾張七宝焼」である。七宝焼は古くから知られ広く有名で、地元の七宝町では、中学校の校章やクラス章も七宝焼が使われている。だが、かつては愛知県内に 200 軒以上あった七宝焼の窯元も、現在ではわずか 8 軒に減少している。厳しい経営環境の中で、職人も高齢となり、後継者のいない職人は次々に看板を下ろしている。

そうしたことから、本研究では、尾張七宝焼がこれからも存続・発展していき、その素晴らしさを地元七宝町の人々自身にも改めて理解が広がるにはどうしたらいいのか、また、地域住民の交流が少ない中、尾張七宝焼を通して住民同士の交流を図るためにはどうしたらいいのか等を把握・検討することを目的に調査・検討を行った。

## II. 研究方法・研究内容

研究方法は、尾張七宝の振興拠点である「あま市七宝アートヴィレッジ」等で七宝焼の職人・関係者への聞き取りを行うと共に、インターネットや七宝町の広報誌等で文献調査を行った。研究内容は、尾張七宝焼の伝統がどのように伝えられているのか、これからも同様の方法等で伝えていけるのか、変えていくところはあるのか等を調査研究した。また、これまで行われてきた七宝焼の存続・発展のための活動を調査して、これから行うべき取組みを検討・提言した。

## III. 研究結果

### III-1. 七宝焼の歴史

七宝焼の起源は古く、紀元前十数世紀にまでさかのぼる。世界最古の七宝焼は、ツタンカーメン王の黄金のマスクに代表されるような時代のものである。ヨーロッパ各地に分散して伝わり、日本には、6・7 世紀頃に中国・朝鮮を経て伝わった。日本で七宝焼が広く作られるきっかけとなったのは、名古屋市に住んでいた梶常吉という人物が 1833 年に七宝の作り方を発見したことに始まる。以後、急速に七宝の製造が広まり、愛知県尾張地方は日本の七宝焼製造の中心地となった。

日本の七宝焼が世界に知られるきっかけになったのが、19 世紀半ばの万国博覧会への出品である。19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて、「尾張七宝焼」は様々な工夫を加えて作品を作り続けてきたが、第二次世界大戦中の生産中断などを経て、現在では失われてしまった技術もある。だが、日本を代表する伝統的な工芸品として、1995 年には経済産業省大臣の伝統的工芸品となっている。

### ■愛知県の伝統的工芸品（経済産業大臣指定）

|         |               |
|---------|---------------|
| 尾張仏具    | 愛知・名古屋市など     |
| 名古屋桐箆笥  | 愛知・名古屋市など     |
| 名古屋仏壇   | 愛知・名古屋市など     |
| 三河仏壇    | 愛知・岡崎市など      |
| 岡崎石工品   | 愛知・岡崎市        |
| 瀬戸染付焼   | 愛知・瀬戸市など      |
| 名古屋友禅   | 愛知・名古屋市など     |
| 有松・鳴海絞  | 愛知・名古屋市など     |
| 赤津焼     | 愛知・瀬戸市        |
| 尾張七宝    | 愛知・名古屋市、あま市など |
| 三州鬼瓦工芸品 | 愛知・高浜市など      |
| 常滑焼     | 愛知・常滑市など      |
| 豊橋筆     | 愛知・豊橋市など      |
| 名古屋黒紋付染 | 愛知・名古屋市など     |

### III-2. 七宝焼の制作工程

七宝焼の制作工程は、他の焼き物とは異なる素材と工夫でできている。以下のような数多くの工程を経て完成する。七宝焼の伝統は、七宝屋が家業として代々受け継いできており、家系によって釉薬の調合がわずかに異なり、色や手法が異なっている。

### ■七宝焼の制作工程

- ①最初に図案の作成をする。この段階で、七宝焼の素材の特徴を活かすことを考慮してデザインを作成する。
- ②銅板で原型をつくり、素地をつくる。これが七宝焼の原型となる。
- ③素地に乳白色の釉薬を焼き付けて、その上に下絵を描き、下絵付けをする。

- ④素地のアールと下絵の曲線を汲み取って、銀線にカーブを作り、素地表面に垂直に接着する、銀線付け（植線）という作業をする。（銀線で下絵の上に形を作り、焼き付ける。）
- ⑤銀線ロウ付という工程に入る。これは、銀線付けが完了した製品にロウ釉薬を薄く振りかけ、線を焼き付けるという作業。
- ⑥線付けの後、少しずつ釉薬を入れて色味を深めていく。
- ⑦釉薬をつけては焼成する。3回程度繰り返す（一番焼、二番焼、三番焼）。この作業を釉薬さしという。
- ⑧800度の窯（炉）で製品全体を均一に焼き上げる。仕上げ焼きでは焼成途中で製品の上下を逆にする。
- ⑨研磨をする。表面を滑らかにして光沢を出し、植線をはっきり出すため、最終仕上げに畳表を使ったりする。
- ⑩最後に覆輪付けをする。上下の釉薬止めの部分を飾り金具で覆う。これを覆輪といい、材料に銀や真鍮を使用する。

#### ■七宝焼の製作体験（筆者の事例）

筆者は、七宝焼の制作は、かつて幼少時、小学校と中学校の各授業とあま市七宝焼アートヴィレッジでの遊び体験の計3回経験があった。3回とも思い通りには作れなかった。本調査研究での参与観察として、改めて製作を体験してみた。丁寧な制作を試みたが、やはり難しく、思い描いていたようにはいかなかった。砂のような塗料を銅板に置く作業で、隣の色同士が混ざってしまっ、輪郭が上手く表現できずに特に難しいと感じた。なかなか綺麗に見えるようにはいかず、素人が作るには難しく、職人が作るようにはいかなかった。七宝焼を作るには、繊細な技術と集中力が必要だということが、七宝焼体験を通して改めて把握できた。こうした素晴らしい技術が古くから絶えずに続いてきたことは、職人やその支援者などの熱心な支えがあってこそと言える。



（筆者撮影）左側が焼く前で、右側が完成した七宝焼



（筆者撮影）上写真が焼く前。下写真が完成した七宝焼。焼く前は、不透明でガラスの砂のようで、七宝焼を焼くと透明感が出て、色が変わる。色を混ぜたりすることは出来ない。

### Ⅲ-3. 尾張七宝焼の現状と課題

#### Ⅲ-3-(1). 尾張七宝焼の現状

「尾張七宝焼」の現状を調査したところ、あま市では現在、会社、個人合わせて10軒が七宝焼関連の仕事に従事している。窯元は、かつて200軒あったのが8軒にまで減少している。

尾張七宝焼は、産業としては極めて厳しい状況にあり、衰退傾向から飛躍的な発展に転じることはないものと見られている。だが、それでも尾張七宝焼の窯元がゼロになることはないとして、その存続に向けて様々な取り組みが行われている。

#### Ⅲ-3-(2). 尾張七宝焼の課題

尾張七宝焼の窯元が減少している原因としては、次のようなことが考えられる。一つは、跡取りがないことである。尾張七宝焼の職人として生活していくためには、生計を立てるのが困難な社会・経済状況にある。「伝統的工芸品」として重要なものとされているが、伝統を守りながら発展させていくことは難しい。尾張七宝焼がかつてよく売れたのは、その時代の社会・経済状況に合っていたからである。今の時代の消費者ニーズに合わせて新しいものをつくると、それは伝統的工芸品とはならなくなる。伝統を守りながら、尾張七宝焼を発展させるのに

は矛盾が生じてしまう。また、尾張七宝焼の職人は高齢化しており、今更新しいものを取り入れようとは考えない傾向もみられる。

二つ目の原因は、原料が手に入りづらくなっていることである。尾張七宝焼が危なくなってきたということ、その元となる銅板をつくる職人やガラスの七宝釉薬をつくる職人にお金が入りにくく、尾張七宝焼よりもさらに減少してきているためである。

### Ⅲ-3-(3) 尾張七宝焼の職人の現状

尾張七宝焼の職人の中には、お金のためではなく、代々の「伝統」を守るために働いていると話す職人が少なくない。「あま市七宝アートヴィレッジ」に携わる職人は、尾張七宝焼の体験教室や実演に携わり、少しでも尾張七宝焼と地元地域に貢献したいと考えている。

七宝焼の職人として一人前になり、自らの作品・製品を出荷するには、技術によって三年や五年、十年かかるなど年単位で習得が必要なため、かなりの精神面での強さと根性が欠かせない。簡単には職人にはなれず、途中で諦めてしまう人も多い。

## Ⅲ-4. 七宝焼の振興拠点「あま市七宝アートヴィレッジ」

### Ⅲ-4-(1) あま市七宝アートヴィレッジのねらい

「あま市七宝アートヴィレッジ」は、尾張七宝焼について、見て、触れて、学んで、七宝焼の全てを楽しめる尾張七宝焼の振興拠点である。地域住民や他地域の人たちが集えるまちのシンボリックな場所ともなっている。

施設内の「七宝焼体験教室」では、オリジナルの七宝焼をつくることもできる。あま市の全ての小学校では、ここで小学生たちに七宝焼に触れて、体験してもらうようにしている。自分たちの住む地域の伝統的工芸品である尾張七宝焼を知ってもらいたい、他地域の人々に胸を張って尾張七宝焼について話せるようになってもらうことも狙いとしている。

### Ⅲ-4-(2) あま市七宝アートヴィレッジの施設概要

あま市七宝アートヴィレッジは、七宝焼の作品鑑賞や制作工程の見学などができる「七宝焼ふれあい伝承館」と、散策路や広場など来館者の憩いの場となる「ふれあい広場」がある。七宝焼ふれあい伝承館は、「導入ゾーン」、「作品展示ゾーン」、「動態展示ゾーン」、「七宝焼体験ゾーン」の4つのエリアで構成されている。

「作品展示ゾーン」では、常設展示室と企画展示室に

分かれ、江戸から昭和初期の作品を中心とした尾張七宝の名品や道具が展示されている。常設展示室では、「七宝物語」と題して七宝焼の歴史の紹介があったり、七宝焼の製作工程が道具で紹介されている。七宝焼の製作は、工程ごとに異なる職人が担当する「分業」が基本である。機械化できる部分は少なく、職人の長年の経験をもとに手作業で作られる。ここでは、尾張七宝の名品も紹介されている。有名な花瓶や装飾用の皿のほかにも、様々な形のものがある。七宝焼は海外輸出向けにもつくられてきたことから、マッチやたばこ入れなど日常の実用品に七宝を施した道具もつくられていた。七宝焼が仕上がっていく工程も見学できるようになっている。

「動態展示ゾーン」では、絵付・植線工房、施釉工房、焼成工房、素地・覆輪工房、研磨工房、釉薬製作室があり、それぞれの伝統技術を間近で見ることができる。「七宝焼体験ゾーン」では、七宝焼の制作体験ができる。あま市七宝焼アートヴィレッジの魅力の一つは、実際にオリジナルの七宝焼を作れることである。

このように、約180年の歴史と伝統のある尾張七宝焼を知れるあま市七宝焼アートヴィレッジでは、七宝焼の美しさや繊細な技に触れることができ、子どもも楽しめる「七宝焼づくり」や、のびのび遊べるふれあい広場もあるため、親子のおでかけスポットとしても人気がある。

### Ⅲ-4-(3) あま市七宝アートヴィレッジの様々な取り組み

あま市七宝焼アートヴィレッジでは、より多くの人に、尾張七宝焼を中心とした七宝焼の歴史を知ってもらうために、2009年度から学芸員による「七宝歴史講座」を開催している。展示室や展示図録等の解説だけでは十分に伝えられず、言い表せない内容について、時間をかけて解説する機会ともなっている。原則として毎年、年3回開催して、年度最初の第1回目は七宝焼や尾張七宝についての基礎的な知識を全般的に解説する内容とし、2、3回目は対象を絞って、深く解説した内容や、企画展のテーマをより深く掘り下げた内容等を毎回異なるテーマで開催している。

ただ、このような七宝焼に関する知識を得られる機会には用意されているが、そうした催しがあまり知られていないことが課題となっている。催しの宣伝は、地域の回覧板や地域便りで伝えられてはいるが、それを知る地域住民は少なく、地域住民以外の人を知る機会もほとんどないとみられる。

そうしたことから、「七宝歴史講座」等の催しの広告チ

ラシなどを、小学校や中学校、公民館などにも広く配布して、子どもから大人まで様々な年齢の人たちの耳に入るような取組みが必要といえる。また、別の方法として、地域を問わず小学校や中学校の社会見学や野外活動の一環として「七宝歴史講座」等の催しを受講できるようにするのも良いと言えよう。

#### IV. 考察・今後の展望

##### IV-1. 尾張七宝焼の振興の取組み

明治16年創業で伝統工芸品「七宝焼」の窯元田村七宝工芸の五代目 田村有紀氏は、尾張七宝焼が消滅してしまうことに危機感を抱き、次のような取組みを行っている。七宝焼存続のために2017年には、どこへでも持っていける広報素材として、尾張七宝の技術を伝える約30分の映像を制作した。その映像を日本国内のみならず、日本を訪れる海外の人にも七宝焼の魅力が伝わるように、ワークショップ等の様々な場で活用しようとした。インターネットで支援を募り、映像制作・広報のプロジェクトを立ち上げた。2020年にも、プロのシンガーでもある田村氏は、尾張七宝・七宝焼の魅力を知ってもらうツールとして、同じく歴史ある和楽器でテーマソングを作るプロジェクトを立ち上げて、インターネットで支援を募った。

田村氏の他にも、尾張七宝焼の存続・発展を願う職人・関係者が、「あま市七宝アートヴィレッジ」で展示会や多くの企画展を開催している。七宝焼の関係者は減ってしまっているが、現状に危機感を持って七宝焼存続のために活動している人もいる。

また、職人・関係者の中には、記念品となる七宝焼の注文を多くもらうことや、壺や花瓶等の装飾品としての尾張七宝焼という重々しいイメージにとらわれずに、新しいものに取り入れることを考えている人もいる。例えば、建築などの内装や小物の実用品に取り入れることが、伝統を守りながらも可能だと考える。

他にも、若い人から新しい意見を取り入れて、海外にも日本の尾張七宝焼を進出させることも可能と考える人もいる。七宝焼は、日本以外にも、中国やフランス、ギリシャ等の世界各地にある。だが、日本の尾張七宝焼は、ガラスの釉薬が透明と不透明の間である半透明のものを使用しているため、綺麗に仕上がる。海外では、不透明のものを使用しているため、日本のものよりも仕上がりがよくないと言われている。そのため、世界で最も美しい日本の尾張七宝焼は、海外での需要も伸びると考える職人・関係者もいる。

##### IV-2. 尾張七宝焼の今後の展望

尾張七宝焼の衰退を止めるためには、後継者が不可欠とされる。だが、七宝焼を作る職人として経済的に成り立たなければならないことから、これからの若い人には厳しい。尾張七宝焼は、全て職人による手作りのために量産することが難しく、市場を広げたとしても生産が追い付かないため、一定程度の収入を得ることが難しい。また、尾張七宝焼は、多くの制作工程を経て完成するもので、以前はその一つ一つの工程ごとに「分業」されていたが、現在は、「分業」する人数がいなくて、「分業」が成り立ちにくくなってきている。

現在、尾張七宝焼だけでなく、日本全国の伝統的工芸品の多くが時代とともに衰退してきている。伝統的工芸品に携わる人たちとその取り巻く環境に対して、国がこれまで以上に積極的に支援をしていかなければ、日本の伝統的工芸品を守っていくことは難しい状況にある。伝統的工芸品を後世に残していくためには、それに携わる原料を作る人や販売する人など全ての関係者の生活を守ることが急務であると考えられる。

尾張七宝焼を存続・発展させるための方策としては、「あま市七宝アートヴィレッジ」の施設を利用した七宝焼作りの体験だけでなく、これまで以上に時間をかけて、職人にもさらに協力をいただいて、「職場体験」といったような取組みを多く行うことが有効と考えられる。そのためには、小学校や子ども会に一層働きかけることも必要となる。実際に職人と一から尾張七宝焼に触れることで、その魅力に気づき、興味や関心を持ち、「職人」という仕事にも関心を持ってもらえる可能性がある。

また、七宝焼づくりを学校の部活動やクラブとして取り入れ、長い時間をかけて七宝焼を学ぶ機会を設けることも有意義なことと言えよう。さらに、地域全体の活性化に向けて、他の地域と協力して、伝統工芸品同士でのイベントを開催して、地域住民の交流を深める機会を設けることも期待される。

##### 【引用・参考文献】

- 株式会社 安藤七宝店「七宝の歴史」  
<http://www.ando-shippo.co.jp/cloisonne2.html>（閲覧日：2020年7月20日）
- 田村有紀【「残り8軒」消滅寸前の尾張の伝統工芸品・七宝焼の存続に力を貸してください】  
<https://faavo.jp/aichi/project/2284>（閲覧日：2020年7月20日）
- 七宝の歴史 | 七宝焼き 東京都認定伝統工芸士 東京七宝「畠山七宝製作所」  
[https://www.tokyo-shippou.com/contents/post\\_7/](https://www.tokyo-shippou.com/contents/post_7/)（閲覧日：2020年10月12日）
- 窪田由奈(2021)「七宝焼の伝統と尾張七宝」『愛知東邦大学今瀬政司ゼミナール卒業論文集 (2021年3月卒業)』